

F 13 家政教育の生涯学習体系化に関する基礎的研究 —— 家庭科学習内容の定着の度合と学習期待について ——  
兵庫教育大 関 志比子

**目的** 社会構造の急激な変化に対処するために婦人の学習意欲は高く、家政に関する学習については演者らの「現代婦人の生活構造と家政教育」の一連の報告(昭和56年度発表)でも明らかに優位にある。婦人の学校後の学習構造に関する諸要因の一つとして学校教育との接続の向題があり、家庭科教育は学校後の家政教育と有機的に統合した生涯学習の体系が必要である。本報告は、婦人の生活課題、学習要求や学習内容と家庭科の教育内容との関連で分析し、学校後の家政に関する学習を充実・発展に導くについて生涯教育の視点から家庭科で育成すべき基礎的学力を論考する資料を探索するための調査研究である。

**方法** 調査用紙当置法によって、昭和56年11月に調査を実施した。対象は広島県全域の婦人会活動のリーダーおよびサブリーダーである。(調査数461名、回収率78.1%、有効回収率77.7%)

**結果** 回答者は20～50代で82%が家事、59%が育児の主任者であり、経済面では74%が主または副次的担い手である。自己教育力を「良好」、「普通」と評価し、月頃、団体、グループあるいは個人学習の形で80%程度の人が学習活動を行っている。調査事項を次のように設定してその結果を得た。1) 家庭科学習の効果に対する評価視点を学力視点と学習内容構成視点から分析すると、生活部門各々には共通性と相違性があり、主として、前者は理論・製作学習、後者は方法学習と管理的内容にみられる傾向である。2) 学校後の生活への有用性については、全体として $\frac{1}{2}$ ～ $\frac{1}{3}$ 程度の連続的有用性が認められるが、内容項目によっては一過性的な有用のみ認められている。3) 家庭科履習によって得た学力を認知している者は生活課題意識が高く、また、学習要求への連絡がみられる。